慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	消えゆく喫煙者の帰還 : Rolfe, Cooke, Barthに見るタバコの伝統
Sub Title	The return of the vanishing smokers : Rolfe, Cooke, Barth
Author	秋元, 孝文(Akimoto, Takafumi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.310(71)- 326(55)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本晶教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0326

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

消えゆく喫煙者の帰還：Rolfe, Cooke, Barth に見るタバコの伝統

秋元　孝文

1．酔いどれ草の文化史

タバコとは何か。

それは植物であり，嗜好品であり，商品であり，アメリカ原住民においては神への神聖な捧げ物，植民地や大戦中においては通貨と，時代時代によってそのアイデンティティを書き変えて来た，いわばレトリックを発動する装置といってもいいだろう。昨今のタバコとかかわる研究を見ても，Jordan Goodman が1993年にタバコの歴史を紡いだ著書に付した "The Culture of Dependence" という副題が，喫煙者のタバコへの依存だけでなく，タバコからの税収を断ち切れない政府をはじめとする様々な形態の依存を総称しているように，あるいは Richard Klein が同じく1993年の著作で，不味くて健康にも有益でないというタバコのその無意味さを，カントのいう「消極的快」になぞらえ積極的に評価し，ゆえにタバコは "sublime" であると語るように，タバコとはその存在じたいが我々に解釈行為を促す性質をもっている。タバコの存在じたいが読まれるべきテクストなのである。そしてそういった非常に文学的な存在でありながら今日まであまり顧みられることのなかったタバコをめぐる状況が，今，変わりつつある。

1997年６月，損害賠償を求めていた米40州とタバコ企業の間で歴史的な和解が成立する。メーカー側は3680億ドル(42兆円)の和解金を支払い，パッケージでのキャラクター使用，屋外広告や自動販売機の設置を禁じられ

たばかりか，客にとって買いにくくするために，店頭の手にとりやすい場所におくことさえも禁じられることとなる。そのうえ青少年の喫煙者を減らすことが義務づけられ，目標に満たない場合は罰金が課せられるのだ。それは，タバコの有害性が方々で議論され，嫌煙意識が高まる昨今の風潮をそのまま反映するような内容であり，和解を報じた *Newsweek* がいみじくもたとえてみせたように，今やタバコは「20世紀の遺物」として近い将来忘れ去られていく運命にあるようだ(37)。こういった反タバコ運動の高まりは，Paul Auster と Wayne Wang 監督による映画 *Blue in the Face*（1995）をゆるやかに統合していた，タバコ屋を店じまいして健康食品店にする，というプロットにも見られる。世間の風当たりが強くてタバコは儲からない，同じ売り物にするならば体に良くて人気のある健康食品の方がいい—「オーギー，時代は変わるんだ。もうタバコじゃない，いまは小麦胚芽だよ」。[1]

しかし，こうして喫煙が過去の習慣として忘れ去られ，喫煙者が「消えゆく種族」となっていく近い将来を考えるときに思い起こされるのは，同じようにかつて「消えゆくアメリカ人」と呼ばれたアメリカ原住民のことであり，さらにはタバコじたいが，コロンブスが新大陸と同時に発見したアメリカ独自のもので，ヨーロッパの視点から見れば「新大陸からの贈り物」だったという事実，そして原住民の文化においては単なる嗜好品ではなく欠くことのできない神聖なものだったという事実である。前出の *Blue in the Face* に端役で出演しタバコに関する逸話を披露している Jim Jarmusch が自ら監督した *Dead Man*（1995）には，奇しくも「タバコ」という言葉が繰り返し登場し，我々の持っている嗜好品としてのタバコのイメージと，アメリカ原住民にとっての「聖なる葉」のイメージのギャップを浮き彫りにする。主人公 William Blake の死への旅の道連れとなった混血のインディアン Nobody は，事あるごとに「タバコはあるか？」と尋ねる。Blake はそれに対して「吸わない」と答えるのであるが，Nobody の言っているタバコとは，自分を導いてくれる人に差し出す神聖な意味でのタバコである。両者のギャップは最後まで埋まることはない。

しかし，タバコが二人の「アメリカ人」をつなぐことが象徴しているのは，コロンブス以前と以後の「アメリカ」をつなぐものもまたタバコであるという事実である。

そしてこういった「タバコ」という視点から捉え直すとき，アメリカは我々が慣れ親しんだものとは異なった姿を現す。もともと原住民のあいだでは神聖なものであったこの植物は，ヨーロッパとの出会いによって世俗的な嗜好品へと変貌していき，その世俗化が今日のアメリカの原型を形成する原動力となったと言っても過言ではない。歴史の原動力となったタバコは，当然アメリカの物語の誕生にも深くかかわっていく。物語としてのアメリカ，そしてそのアメリカが生み出した物語。その両者に関わる起源としてのタバコを読み直すことの意義は，今日非常に大きいだろう。(2)

コロンブスの新大陸発見は，ヨーロッパとタバコの最初の出会いでもある。1492年10月15日，サンタ・マリア島からフェルナンディア島へと移動する途中，丸木舟に乗った男がやってきてコロンブスに与えたもののなかに「乾いた葉っぱ」があった。コロンブスはこのタバコの葉について「この葉っぱはサン・サルバドール島でも贈物として私に持ってきましたから，彼らが珍重しているものに違いありません」と語っている(*Journal* 45)。この貴重な葉っぱの用途が明らかになるのはそれから20日ほど経った11月6日，内陸に調査のために派遣した Luis de Torres と Rodrigo de Jerez の二人の報告においてである。ラス・カサスの『インディアス史』に記録された報告によると，原住民は "musket" 状にしたこの "herbs" から煙を吸い込んでいたという(Wilbert 10)。この葉巻がヨーロッパ人によって最初に目撃された喫煙である。その後の記録でラス・カサスは，喫煙するようになったスペイン人に対して，良くない習慣だ，とたしなめるのであるが，それに対する返答は「喫煙をやめることは自分たちの手に負えない」という言葉であり，タバコの発見の後早くもその常習性が認められる。こうしてタバコはヨーロッパの知るところとなり，賛否両論巻き起こしながらも16世紀半ば頃までには急速に各国に広まっていくこととなる。それと同時にタバコのもつ意味合いも変容していく。元来アメリカ原住民

にとってのタバコとは儀式に使われる神聖なもの，あるいは医学的な治療に用いられるものであった。彼らの多くはシャーマンの儀式において幻覚症状を起こさせるためや，太陽や川や海，そして精霊に捧げ，農作物の収穫や狩りの成功を祈るためににタバコを用いた。[3] また，医学的な用法としては鎮痛剤としてタバコの汁を塗ったり，傷口の消毒のために葉を貼るということがなされていた。ヨーロッパが当初タバコに対して期待したのもこういった医学的な「万能薬」としての役割であったが，その後100年ほど経つうちにタバコは "sacred" なものから "secular" なものへと変容していく。我々にもなじみの深い嗜好品としてのタバコの誕生である。アメリカ原住民において，嗜好品としてタバコを用いることは1700年頃まで概して少なくタバコの吸い過ぎというのはなかったのだが，ロジャー・ウィリアムスが「ヨーロッパ人ほどタバコを吸うナラガンセット族は見当たらない」と語っているように，タバコは旧大陸を経由するうちにその神聖さを失い，その過程を経て新たに嗜好品としての顔を持ち大々的に流通することになる(Paper 6)。たとえばイギリスのタバコの輸入量は，1603年には2万5000ポンドだったのが1700年には3800万ポンドにまで増加している。そして，アメリカの物語が始まる背景にはこのタバコの変容があった。

2．ヴァージニア：ポカホンタス神話とタバコ

よく指摘されることだが，アメリカ大陸におけるイギリスの最初の植民地は，ピューリタニズムに基づく首尾一貫性を持ちアメリカ史のはじまりとして神話化されているニューイングランドではなく，もっと曖昧で世俗的なヴァージニアである。1634年に同じくチェサピーク湾に建設されるメリーランドとともに，そこに移住して来た人々は宗教的な動機をほとんど持ち合わせていなかった。彼らの動機はむしろ経済的な理由であった。イギリスでの人口増加に伴う物不足，土地不足，賃金低下から逃れるための移住である。そしてこのヴァージニアとメリーランドが成り立ち，その後のアメリカの土台となるために必要不可欠だったのがほかならぬタバコで

ある。

1590年に補給船が来たときには消えてしまっていたロアノーク島の植民地ののち，再びヴァージニアに植民地が建設されたのは1607年のことであった。この年ヴァージニア会社によって新大陸に送られた人々はジェームズタウンを建設する。しかし，本国に送り出すような物資を産出できず，1609年から1610年の冬にかけてのいわゆる“starving time”ののちには500人の人口が60人にまで減少し，植民は失敗に終わろうとしていたのだが，この危機を救ったのがタバコであった。

1613年にジェームズタウンから初めてイギリスへタバコが輸出され，ロンドンのバイヤーがこれを気に入ったことからタバコの一大ブームが起き，人々はほかの作物をやめてまでタバコの栽培に精を出すことになる。1620年にはその輸出量は4万ポンドだったのが，10年後には150万ポンドにまで跳ね上がる。こうしてタバコによってヴァージニアは救われ，イギリスの植民の足場が形成される。主要産物となったタバコがなければ新大陸での植民地の定着はもっと遅かったはずである。そしてタバコ栽培の特殊性は植民地の文化全般に強い影響を持つことになる。たとえばタバコ栽培はほかの作物と異なって刈り入れの後に“curing”と呼ばれる乾燥作業や樽詰めが必要なため，生産者は恒常的に忙しく，この工程が独特の時間のリズムを作ったし，空間的にも，土地を疲弊させるタバコを栽培するには広大な農地が必要なため，町は分散し中心となる都市が形成されなかった。

さらにタバコの影響力は，のちのアメリカ社会の原型をも形成する。生産規模が拡大するにつれイギリスからの年季契約奉公人だけでは労働力が不足しはじめ，安価な労働力への需要は奴隷制度を必要とした。オランダ船によってジェームズタウンに連れて来られた20人が，イギリス領植民地での最初のアフリカの黒人であり，独立後の1790年に行われた最初の国勢調査でもっとも黒人人口が多かったのは，全体の40%をも占めたヴァージニアであった。このように，のちの合衆国社会が抱える最大の問題となる黒人奴隷問題は，タバコに根差しているのである。一方，タバコ産業は奴

隷という労働力を得て拡大し，一連の大プランターたちを生み出す。アメリカ建国の祖であるワシントン，ジェファソン，マディソンらはヴァージニアの大プランターであり，彼らの生活の基盤がタバコ生産であったことは，アメリカという物語の発展におけるタバコの重要性を示すもう一つの証左として見逃せない。また，流通過程を独占した本国商人への不満が独立革命の遠因となったことや，土地需要の高まりが西漸運動を促したことなども，タバコの影響の例である。

こうしてヴァージニア，そしてアメリカはタバコという不確かな産物にあらゆる面で影響を受けながら発展していくのだが，我々にとってなじみの深いアメリカ創成期の神話もタバコと深いかかわりを持っている。それがポカホンタスの物語である。

我々がよく知っているポカホンタスの物語は，例の“rescue”の場面である。キャプテン・ジョン・スミスが原住民の王パウハタンに捕らえられ，その頭を打ち砕かんと棍棒が振り上げられた瞬間，王の娘ポカホンタスが自らの身を投げ出してスミスの命を救う。このエピソードを伝えるものはスミス自身の手による *Generall Historie* における記録しかなく，これまでにもその信憑性が取り沙汰されてきた。ポカホンタスの“rescue”があったとされるのが1607年だが，しかし1608年のスミスによる *True Relation* には，パウハタンに捕らえらえたことが記録されているにもかかわらず救出についてはまったく触れられていない。*Generall Historie* が出版されるのは1624年のことであるが，この間にポカホンタスが亡くなり，1622年には原住民による植民者の「大虐殺」が起こり，原住民根絶のレトリックが必要とされたこと，またスミス以前にこれと同じような救出の物語が伝えられていたことなどから，スミスの作り話と見る向きもある。また，実際に“rescue”があったとしても，それは神話が伝えるようなポカホンタスのスミスへの恋愛感情に基づくロマンスではなく，同盟関係に入るための模擬裁判の儀式であったというのが定説になっている。(4) ただ，そういった真相とは無関係に，神話は読者の欲求を満たす形に変容していくのだが，その中で抜け落ちてしまったひとつのエピソードがあ

る。

ポカホンタスはのちに白人側に誘拐されキリスト教に改宗した後，原住民ではなく，植民者の一人と結婚し子をもうける。しかし，その相手とはスミスではなく，John Rolfe であった。そして，このロルフこそが瀕死の状態のジェームズタウンを救い，二人の結婚こそがその発展をもたらした。それを可能にしたのが，実はタバコだったのである。

ジョン・ロルフは1609年に Sea Venture 号に乗ってジェームズタウンへと出帆する。途中バミューダ海域で嵐に遭遇し，この様子がシェイクスピアの *Tempest* の題材となったのは有名な話であるが，翌1610年，妻とともにジェームズタウンに到着したロルフが輸出用産物として目をつけたのがタバコであった。当時ヴァージニアの原住民が栽培し，使用していたのは Nicotiana rustica と呼ばれる種であったが，これは植民者にとっては「貧弱で，弱々しく，苦みがある」ものだった。彼らが本国で慣れ親しんでいたのは，スペイン領植民地からもたらされていた Nicotiana tabacum という種だったのである(Robert 8)。どのような経路を経たのかは定かではないが，ロルフはこの Nicotiana tabacum の種子を入手し，ヴァージニアで初めて栽培に成功する。1613年にジェームズタウンから初めてイギリスへ輸出されたタバコはロルフの手によるものだったのである。一方，この年の四月，18歳のポカホンタスはイギリス人サミュエル・アーゴールによって誘拐され，人質としてジェームズタウンに一年ほど滞在することとなるのだが，その間にイギリス流の礼節や宗教を教えた者の中にロルフがいた。キリスト教に改宗し「レディー・レベッカ」となったポカホンタスとロルフは1614年に結婚，息子のトマスをもうける。1616年にはロンドンに赴き英王室に謁見するが，ヴァージニアへ向けての出航の準備途中，ポカホンタスは病死してしまう。

ロルフとポカホンタスの結婚の背後にいかなる動機があったのかは今となっては明らかではない。ロルフがヴァージニア総督サー・トマス・デイルに結婚の許しを請うために書いた手紙にある「植民地の利益と国の名誉と神の栄光と自分自身の救済，そして不信心の徒ポカホンタスを神とキリ

ストの正しい教えに導くために」という説明は，異人種との結婚という前例のない行為を正当化するためのレトリックとも読めるが，結婚によって実際に植民地に利益がもたらされたことを考えると，ある程度偽らざる気持ちだったのかもしれない(Tilton 14)。その意図はともかく，もたらされた結果としてはこの結婚はイギリス側にとって成功であった。二人の結婚によって植民者と原住民の間には八年間の和平が成立し，この間にタバコ栽培はどんどん拡大し，1619年にはイギリスへの輸出量でスペイン領産タバコを越えることとなる。ポカホンタスの死後ロルフが再びジェームズタウンに戻ったころには，どこもかしこもタバコだらけで道や市場にまでタバコが植えられていたくらいである。こうしてジェームズタウンはタバコによってブーム・タウンとなり，疫病の流行で多数の死者が出たにもかかわらず，ヴァージニアのイギリス人人口は1618年には400人だったのが1622年には1240人と，飛躍的に増加する。そして原住民との和平が崩壊したのもこのタバコが原因であった。移民の流入とタバコ栽培のための土地需要の高まりによって両者の間に生まれた緊張関係が1622年の原住民による「大虐殺」を引き起こし，それが原住民駆逐の口実となっていくのである。

ただし，タバコ関係の文献では「植民地最大のロマンス」と紹介されるポカホンタスとロルフの結婚も，今やスミスとポカホンタスの神話の陰でほとんど忘れられてしまっている。たとえばごく最近の「ポカホンタスもの」であるディズニー映画『ポカホンタス』にはロルフはまったく登場しない。ロルフに続いて原住民と結婚する者もほとんどいなかったし，ヴァージニアでは1662年までには法によって異人種間結婚は禁じられる。当初ロルフの物語はスミスの救出と同じくらい重要であったが，合衆国が独立したのち John Davis によって，ポカホンタスのスミスに対する愛情が「救出」の原因だとするロマンスが生みだされ，それ以降このロマンスに対するアンチ・クライマックスであるロルフとの結婚は無視されるようになっていく。ポカホンタスとスミスのロマンスは，Peter Hulme の言葉を借りれば「イデオロギー的な期待のとおりに歴史が動いてくれた（とい

うことに，少なくともなっている）唯一のケース」(143)であるが，しかしそれを裏面から支え，原住民と植民者の友好関係が始まっていたかもしれない，という白人中心的な偽善のレトリックを可能たらしめる“right savage”としてのポカホンタス像を作り出したのは，今や忘れ去られてしまっているロルフとの結婚であり，その背後でこの物語の原動力となっていたのはほかならぬタバコだったのである。

3．メリーランド：活字文化とタバコ

このようにヴァージニアの創成期，そしてそこから生まれた物語はタバコ抜きでは語れないものなのだが，同じくチェサピーク湾に面していたメリーランドの歴史もタバコの上に成り立っている。この地では1634年に植民が開始され，当初こそ経済的多様性を図るためにタバコは栽培されなかったが，ほどなく彼らはタバコに魅了され，17世紀のメリーランド住民はほぼすべてがタバコによって生計を立てることとなる。当然地域社会におけるタバコの役割も大きく，1733年まではタバコが通貨として取引され，役人の報酬もタバコで計算されていた。その他の社会的報酬や罰金の支払いもタバコで行われ，たとえば1728年の「オオカミ，カラス，リスの駆除促進のための条例」は，課税対象のすべての住民に対して，地域の治安判事に三匹のリスまたはカラスの頭を納めることを義務づけているのだが，もし足りない場合には一匹につき2ポンドのタバコが罰金として徴収され，逆にオオカミの頭をもってきた者には200ポンドのタバコが報酬として支払われた。その他，姦通や私通もそれぞれタバコ1200ポンドと600ポンドの罰金を課された(Nichols 9)。また，ここでもヴァージニア同様，タバコ栽培のための労働力への需要が奴隷貿易を促した。人口全体に占める奴隷の比率は1690年に15%だったのが1755年には38%まで増加し，栽培者の奴隷所有率も，17世紀の終わりにはほとんど0%だったのが，1720年には約1/4になり1760年には46%，とほぼ半数が奴隷を所有することとなる。こうしてメリーランドという物語もタバコから形成されていくのだが，そこにおける文学作品の生成は，ヴァージニアとはいささか趣が異な

り，タバコは物語の背景となったばかりではなく，より直接的に文学の誕生を促すことになる。それが出版技術の導入である。

タバコ生産に植民地の存在そのものをゆだねていたメリーランドにとって，ヨーロッパ市場でのタバコ値の上下は死活問題であった。18世紀初頭には，頻繁に起こるタバコの値崩れへの対策が盛んに議論されることとなる。輸出先であるヨーロッパのタバコ需要の高まりに触発された生産の拡大は，やがて供給過多による大幅な価格の下落を招く。損失を補うために生産を増大することはさらなる価格の下落を招くだけであり，最良の方法はタバコの品質を上げ生産を制限して，価格をまた上昇させることであった。しかし全体にとっては利益をもたらす方策ではあっても，唯一の換金作物で，税金や借金の納入手段でもあったタバコの生産を制限することは，とくに小規模のプランターにとっては大打撃であり，彼らは当然反対した。

Capper Nichols の研究によると，メリーランドでの文学を生み出したのはこのタバコ制限をめぐる論争だった。議会はこの問題を巡って1726年に William Parks に印刷装置の設置を要請し，この時よりメリーランドの出版が確立される。Parks の手によるパンフレットは読者にタバコ生産制限の必要性を訴えるのだが，当時他に出版物上を賑わせた話題としては，タバコで支払われていた牧師や役人の給料についてや，タバコに代わる紙幣の導入の問題などがあり，出版物の多くはタバコがらみの議論の場となった。また Parks 自身が民衆を啓蒙する装置としての活字の重要性を認識していたことは文学史的にも非常に意義深い。こうして出版文化が植民地に根付き，1727年にはこの Parks によってペンシルヴァニア以南初の新聞である *Maryland Gazette* が発刊され，そこで掲載された Ebenezer Cooke や Richard Lewis の詩は，のちに本の形でも出版されることとなる。

こうしてタバコ論争から生まれた出版文化の副産物として，メリーランドで初めての “belles lettres” が生まれるのだが，その内容もまたタバコに関連したものであった。たとえば1708年にロンドンで出版されたのち

1731年にアナポリスで再版されたクックの代表的な詩 "The Sotweed Factor ; or, A Voyage to Maryland" はその題名どおり，入植者と交易するためにイギリスからやってきたSotweed(タバコ)のfactor(仲買人)を主人公に，彼の会う詐欺や侮辱を通して新世界の野蛮さや文化のなさを皮肉を込めて描くものである。詩の最後には「神の怒りによって滅びてしまえ」とこの地を呪う主人公が，タバコの仲買人であるという事実は，それじたいメリーランドとその文化的中心にあったタバコとの緊密さをうかがわせるが，この続編にあたる "The Sotweed Redivivus : or The Planters Looking-Glass"(1730)は，今や年老いてメリーランドに居住している前作の仲買人を語り手に，より直接的に当時のタバコを取り巻く問題，すなわち紙幣の導入やそれによる賃金の支払い，タバコ生産の制限や産業の多様化，といった話題についての議論を展開している。Chris Beyersはこの作品に当時人気の高かったBernard Mandevilleの *Fable of the Bees* (1748) の影響を読み取り，個々の悪徳やモラルの低下は社会全体の繁栄のためには致し方ない，それよりも「巣」全体が発展することのほうが大事である，という功利主義的な姿勢を指摘している。そのため作品でタバコに関して "nauseous Weed" "stinking Indian Weed" と蔑んだ呼び方がなされても，これを根絶させようというような論調はない。全体の繁栄に結び付く限り，たとえ悪徳であっても善なのである。

クック自身は，文学史的にはほとんど忘れ去られた存在であるが，その作品に現れたこうした功利主義的な姿勢はアメリカ思想の原型を探る意味において有効だ。タバコで成り立ったメリーランドの関心は，信心深い人々の宗教的共同体をつくることでも，より道徳的な文明を確立することでもなかったし，社会的に責任のある有益な産物をつくりだすことでもなく，ただそれ自身が繁栄することであった。それは私たちがよく知っている敬虔なピューリタンに源をもつアメリカの神話とは異なる，もう一つのアメリカの顔である。

その生涯には不確かな点が多く，作品も重要視される事がなかった自称「メリーランドの桂冠詩人」エベニーザー・クックが，再び脚光を浴びる

のは1960年，メリーランドはボルティモアの前衛作家 John Barth の手によってである。その名も *The Sot-Weed Factor* という小説において，クックの生涯，新大陸での冒険がバースの想像力によって作品化される。そしてこの小説は，我々が見てきたヴァージニアとメリーランドという二つのタバコ植民地とそのタバコから生まれた二つの文学を結び付けるものでもある。

物語は17世紀後半のイギリスとメリーランドを舞台に，クックとその双子の妹，この二人の幼少の頃からの家庭教師であった Henry Burlingame を中心に展開する。父のタバコプランテーションを継ぐために新大陸にやってきたクックは様々な事件に巻き込まれ，その一連の事件が現実のクックの詩に対するバース流の解釈としてつくられたフィクションとなっているのだが，バースの歴史改変はクックの生涯だけにおさまらず，もうひとつの大きなプロットである孤児バーリンゲームの父親探しも，植民地時代の歴史的神話の読み直しの上に成り立っている。そしてここで読み直されているのが，先程も触れたポカホンタスとスミスの物語なのである。バーリンゲームの祖父はキャプテン・ジョン・スミスの部下であり，その手記 *The Privie Journallof Sir Henry Burlingame* が語り直すところによると，ポカホンタスによる "rescue" の真相はロマンスとは程遠いものであった。

> ...whereas his [Powhatan's] daughter had seen fitt, to save my C^{apts} life, what time it had been the Emperours pleasure to dash out his braines, then my C^{apt} must needs regard him selfe affianc'd to her, and submit him selfe to that some labour (to witt, essaying the gate to Venus grotte) as her former suitors. But . . . with this difference, that where, having fail'd, her Salvage beaux had merelie been disgrac'd, and taunted as olde woman, my C^{apt}, s^{hd} he prove no better, his head w^{d} be lay'd againe upon the stones, and the clubbing

of his braines proceed without quarter or respite. (Barth 154)

救出されたスミスは命と引き換えに，屈強なる原住民たちの誰ひとりとして果たせなかったポカホンタスとの性交を命じられることになる。そのときの秘策を解き明かすために，ばらばらになってしまったこの手記とスミス自身の筆による *A Secret Historie* を求めて物語は展開していく。ポカホンタスとスミスの神話はバースの語る「真相」によってロマンスの虚飾をはがされ，機械的で野獣的な性関係として世俗化して描かれる。それは神話を形成するイデオロギー的な要請がなくなった時代だからこそ可能な読み替えであるのだが，こうして植民地を支えたタバコから生まれたアメリカの黎明期の物語は，途切れる事なく現代までその水脈を保ち，新たな命を吹き込まれた同じくタバコから生まれた詩人の半生とともに，ポストモダン作家の想像力を刺激し，20世紀にまで至るひとつの流れを形成しているのである。

4．アメリカン・ナラティヴのタバコ起源

もちろんアメリカの植民地がすべてタバコだけで成り立っていたわけではない。ヴァージニアやメリーランドよりもアメリカの起源として認知されているニューイングランドのピューリタン社会では，原住民の習慣であるタバコは忌み嫌われ，その使用は非難された。たとえば1634年，マサチューセッツ議会は公衆の面前でタバコを摂取することや，二人以上の者が一緒に摂取することを禁じる法令を成立させているし，1643年には植民地に新たに到着したものの前で摂取すること，翌年には商品化することも禁じられた。この法令は1646年には早くも廃止されてしまうのだが，こういったピューリタンの建前上のタバコ嫌悪は Mary Rowlandson のインディアン捕囚体験記にも見られる。1676年にフィリップ王率いるアルゴンキン族によって捕らわれたローランドソンの「八回目の移動」には，この原住民の酋長に，タバコは吸うかと聞かれる場面がある。以前は吸っていたが

捕囚されてからは吸っていないと語るローランドソンは，そこでタバコについてこう論評を付け加えるのを忘れない—「それは人間から貴重な時間を奪おうと悪魔が仕掛けた罠のようなものです」(Vaughan 47)。

タバコとピューリタンはかように折り合いが悪い。8歳の時からタバコを覚え，食事のとき以外は絶えずタバコを吸い，夜中に目を覚ましてはまた吸っていたというアメリカ文学史上最大の喫煙者 Mark Twain にとって，妻をはじめとする喫煙をとがめる人々はみな「ピューリタン」であったし，現在の嫌煙運動にしても Klein によれば「清教徒伝来の文化が，公衆衛生の見かけのもとで道徳的判断を立法化して社会にそのヒステリー的ヴィジョンを押し付け」るゆえのものだという(3)。

しかし，Sacvan Bercovitch が *The Puritan Origins of the American Self* (1975) に表したように，アメリカの起源がピューリタンにあるとするならば，その首尾一貫性の陰に隠れてきたのがアメリカのタバコ起源だといえよう。そのバーコヴィッチ自身も，*The Rites of Assent* (1993) では，ピューリタン起源を "fantasy" であると自己批判しているのだが，それでもこの "fantasy" はいまだ強力であり，Klein のように嫌煙運動の背後にピューリタニズムによる抑圧を読み込むのは， 取りも直さずその言説がいまだに根強いからである。だが，ニューイングランドのピューリタンが一つの信仰によって統一された図式化しやすい単一文化だとすれば，我々が見て来たタバコ起源は，アメリカの起源が元来多元文化的だったという事実を示してくれる。タバコは植民地に最初の安定をもたらし，原住民との和平を導き，のちにまで語り継がれる神話の誕生を後押しした。そして神学ではなく，タバコというもっと世俗的な話題が活字文化を育て文学をつくりあげ，その主題ともなった。アメリカの物語学の起源は単一のものではなく，ピューリタン的なるものの裏側ともいえる世俗的な起源があり，それを支えてきたのはこの大陸に古くから根をはり，聖なるものと崇められ，あるいは悪魔の葉と蔑まれてきたタバコなのである。

タバコが本当に「20世紀の遺物」となって消えゆく運命にあるのかどうかはわからない。しかし，もしそうなればアメリカの歴史にとって一つの

大きな転換となるであろう。我々がアメリカを知る前からタバコはそこにあり，アメリカという物語を紡ぎ続けてきた。その途方もなく長い時代が終わりを告げることとなる。だからこそ今タバコ起源を見直すことが重要なのである。そして，この葉の上にアメリカが成り立ったという事実は，大国の起源としてはいささか頼り無げではあるが，そのぶんアメリカという国の特殊性をも表している。もし，不必要なものへの欲求こそがモダニティを象徴するのだとすれば，たしかにアメリカは最初の近代国家である。なにしろアメリカを成り立たせたタバコは，ヴァージニア会社の人間でさえ「人間の生活に必要でもなければ飾りにもならず，ただちに煙になって消えてしまうというユーモアのうえに成り立っている」(Wagner 17) と評した不確かで曖昧な存在なのだから。

Notes

(1) *Blue in the Face*, dir. Wayne Wang and Paul Auster. Miramax, 1995. 引用箇所は Paul Auster, *Smoke & Blue in the Face* (New York: Hyperion, 1995) 256. 日本語訳は柴田元幸他訳『スモーク&ブルー・イン・ザ・フェイス』(新潮文庫 1995年) 所収 東野雅子・市瀬博基訳を参考にした。

(2) アメリカのタバコ史に関する研究はいくつかあるが，アメリカ文学におけるタバコの研究は少ない。個々の作家について扱ったものとしては，山本晶がメルヴィル作品における喫煙と飲酒の場面を取り上げ，Emerson がマーク・トウェイン本人の喫煙習慣について論じている。

(3) アメリカ原住民におけるタバコの使用に関しては Paper, Pego, Wilbert を参照。

(4) ポカホンタス神話の真相については Young 397 ; Hulme 147-52 ; Tilton 5-6参照。

Works Cited

Barth, John. *The Sot-Weed Factor*. New York : Doubleday, 1960.

Bercovitch, Sacvan. *The Puritan Origins of the American Self*. New Haven : Yale UP, 1975.

…. *The Rites of Assent*. New York : Routledge, 1993.

Beyers, Chris. "Ebenezer Cooke's Satire, Calculated to the Meridian of Maryland." *Early American Literature* 33. 1 (1998) : 62-85.

Breen, T. H. *Tobacco Culture: The Mentality of the Great Tidewater Planters on the Eve of Revolution*. Princeton: Princeton UP, 1985.

Emerson, Everette. "Smoking and Health : The Case of Samuel L. Clemens." *The New England Quartely* 70. (1997) : 548-66.

Goodman, Jordan. *Tobacco in History : The Cultures of Dependence*. London : Routledge, 1993. 和田光弘・森脇由美子・久田由佳子訳『タバコの世界史』(平凡社, 1996年)。

Gunn, Giles, ed. *Early American Writings*. Penguin, 1994.

Hulme, Peter. *Colonial Encounters : Europe and the Native Caribbean, 1492-1797*. London : Routledge, 1992. 岩尾龍太郎・正木恒夫・本橋哲也訳『征服の修辞学ヨーロッパとカリブ海先住民, 1492-1797年』(法政大学出版, 1995年)。

The Journal of Christopher Columbus. Trans. Clements R. Markham. New York : Burt Franklin, n.d. 林屋永吉訳『コロンブス航海誌』(岩波文庫, 1992年)。

Klein, Richard. *Cigarettes Are Sublime*. Durham : Duke UP, 1993.

Main, Gloria L. *Tobacco Colony : Life in Early Maryland, 1650-1720*. Princeton UP, 1982.

Nichols, Capper. "Tobacco and the Rise of Writing in Colonial Maryland." *Mississippi Quarterly* 50 (Winter 1996-97) : 5-17.

Paper, Jordan. *Offering Smoke : The Sacred Pipe and Native American Religion*. U of Alberta Press, 1988.

Pego, Christina M, Robert F. Hill, Glenn W. Solomon, Robert M. Chisholm, and Suzanne E. Ivey. "Tobacco, Culture, and Health among American Indians : A Historical Review." *American Indian Culture and Research Journal* 19. 2 (1995) : 143-164.

Robert, Joseph C. *The Story of Tobacco in America*. New York : Alfred A. Knopf, 1949.

Routree, Helen C. *Pocahontas's People : The Powhatan Indians of Virginia Through Four Centuries*. Norman : U of Oklahoma P, 1990.

Tilton, Robert S. *Pocahontas : The Evolution of an American Narrative*. Cambridge : Cambridge UP, 1994.

Wagner, Susan. *Cigarette Country : Tobacco in American History and Politics*. New York : Praeger, 1971.

Wilbert, Johannes. *Tobacco and Shamanism in South America*. New Haven :

Yale UP, 1987.
Young, Philip. "The Mother of Us All: Pocahontas Reconsidered." *Kenyon Review* 24. 3 (Summer 1962) : 391-415.
上野堅實『タバコの歴史』(大修館, 1998年)。
ノートン, メアリー・ベス他『アメリカの歴史①新世界への挑戦』白井洋子・戸田徹子訳 (三省堂, 1996年)。
山本晶「メルヴィルの酒タバコ観」『英語青年』137巻436-437。
山本幹雄『大奴隷主 麻薬紳士 ジェファソン』(阿吽社, 1994年)。
「42兆円和解の損得勘定」*Newsweek* 日本版 1997年7月2日32-35。